

あつきと行く 少年勝海舟

～ゆかりの地からのメッセージ～



弘福寺1

勝海舟さんが少年時代を過ごした墨田区では、ただいま東京スカイツリーが建設中です。

2012年春の開業に向けて、上へ上へと成長する過程が話題になっています。

わたしが訪ねた時期は、秋の紅葉が終わりに差し掛かっていました。

見渡せば紅葉、地面には落ち葉のじゅうたん、空は秋晴れで、東京スカイツリーを眺めながらの散策はとても楽しかったです♪

わたしはスカイツリーを撮影したくて、わざわざ押上駅（おしあげ）で下車し、目的地の弘福寺（こうふくじ）までおよそ16分ほど歩きました（画：2）。

ちなみに、曳舟駅（ひきふね）で下車しますと、徒歩10分ほどで弘福寺に到着します。

これからも度々登場しそうなスカイツリーですが（笑）、押上駅そばで撮影した画像はこちら（→※次ページに）。

ドーン！かなり大きいでしょ？

※【東京スカイツリー 押上駅にて】（画：1）







【弘福寺】（画：2）

弘福寺の本堂は、残念ながら外装の工事中でした。

わたしがお参りを済ませると、さっそくお堂の前に、晩年のお姿で勝海舟さんが立っていました（画：3）。

「おう、よく来たな。」

こちらを見ると、とても元気そうな笑顔で話しかけてくれました。

【あっきーと行く坂本龍馬～ゆかりの地からのメッセージ～】

<http://p.booklog.jp/book/5676>

でお会いして以来です（笑）。

前作でも勝海舟さんのメッセージをご紹介しますので、まだの方はぜひ読んでみてくださいね。

特に勝さんとあっきーの最初の出会いは必見ですよ！

勝さんは若い頃に弘福寺で禅の修業をしています。

禅の修業では「無になること」を学び、武士道にも通じると気づいてからは時間を見つけては進んで座禅を組んだそうです。



【弘福寺 本堂】（画：3）

続けて、勝さんは自身の少年時代について話してくれました。

とにかく好奇心旺盛で負けず嫌いな子供だったそうです。

はい、勝さんと接しているとわかる気がします…。

勝少年は剣術、勉学、その他の習い事をとても熱心に取り組んだそうですが、

「他の子供たちのように、ただ遊びたいとは思わなかったのですか？」

とわたしが質問すると、

「嫌々やらされているなどと思うことはない。」

と答えてくれました。

むしろ子供ながらに、勉強することを許されている身分であり、自分は恵まれているのだとわかっていたそうです。

今の子供たちは学校に、塾に、習い事にと忙しい日々を過ごしているかと思えます。

勝少年もどうやらとても忙しいスケジュールをこなしていたようです。ただ、それは自ら進んで取り組んでいたそうです。

学びたいことはたくさんある。

一日は限られている。

考えて行動しなければ実のある時間は過ごせない。

そこで勝少年は、修行僧の一日の過ごし方からヒントを得て実行しました。

きちんと決まっている一日のスケジュールの中で、それぞれに集中して取り組んでいるお坊様の様子を見て、自然と学び取ったのです。

大人になるまでずっと役に立ったと言っています。

しかし、いくら勝海舟さんでも（笑）、ちゃんと子供らしい一面がありました。

威勢が良いお父さんは家庭でも大声を出していたようですが、勝さんはにぎやかで退屈しない家だったと言っていました。

お父さんが家にいるときは、よく親子で話をしたとも言っています。

また幼い頃は、お父さんとは全く異なる性格の穏やかな祖父に、とてもかわいがられたそうです。

祖父はいつも勝少年の目を見て、それは嬉しそうに、

「よかった。よかった」

と頷きながら、話を聞いてくれたそうです。

勝さんが言っていました、祖父の前にいるときが一番素直で子供らしい姿でした。

わたしは弘福寺で、勝海舟さんから読者へ向けてのチャネリング・メッセージを受け取りました。

たった一日で、成功したり偉人と言われるような人物になった者などはない。

日々の積み重ね、一時間、一分、一秒、それらの内容によって形成されていくものである。

要は日々過ごしている時間に、どのように意味を持たせるか。

そして効率よく、それらを短時間で吸収し、一つ一つ身に着けていくことにかかっている。

厳しい言い方ではあるが、楽をして日々をぼんやり過ごしている者は、そもそも成功する、名を残すなどとは無縁であると思うがよい。

人に憧れを抱かせる人物というものは必ず努力をしている。

それも自分自身のためとわかった上で、努力を惜しまないのである。

わたしはよく勝さんのことを、こっそり「厳しい師匠」と呼んでいます（笑）。
しかし、いつも細かくアドバイスやメッセージを下さるので「なるほど！」と納得することが多いです。

わたしは弘福寺を離れる前に、改めて勝海舟さんへご挨拶をしました。

あっきー

「これから勝海舟さん、あなたにゆかりがある方々のメッセージを本に書きます。
どうぞよろしくお願いします。」

勝さん

「おう、楽しみにしてるぞ。
遠慮なく、どんどん言うから、覚悟しておけよ。（笑）」

あっきー

「・・・。」

隅田川七福神コース案内板

SUMIDAGAWA SHICHIFUKUJIN COURSE INFORMATION

弘 福 寺 布 袋 尊

KOU FUKU JI HO TEI SON

黄檗宗弘福寺は、三百余年の昔、名僧鉄牛禪師てつぎゅうぜんしによって創建された。黄檗宗は禪宗の中でも中国色の強い宗派として知られ、当寺に布袋尊の御像が安置されたのも、実はその黄檗禪の性格に深くかかわるのである。

布袋尊は、唐時代の実在の禪僧である。常に大きな布の袋を持ち歩き、困窮の人に会えば袋から財物を取り出しては施し、しかも袋の中身は盡きることがなかった。その無欲恬淡むよくてんだんとして心の広い人柄は、真の幸福とは欲望を満たすことだけではないことを、身をもって諭した有徳うとくとして、世人の尊崇を受け、七福神としても敬われたのである。

墨堤常夜灯1

わたしは弘福寺を後にすると、そこから徒歩で数分のところにある墨堤常夜灯(ぼくていじょうやとう)へ向かいました(画：1)。

ここはかつての牛嶋神社(うしじま)の境内地だそうです。

ちなみに現在の牛嶋神社は、関東大震災後に墨堤常夜灯付近から移転したそうです。

墨堤常夜灯の前に立つと、昼間だというのに、わたしには夜の景色が映っていました。

そこにはまるで隅田川を往来する川舟から眺めるように、やわらかいぼんやりとした灯が見えました。

その灯りの先には、カメラのズームで寄っていくように、しだいに奥に広がるかつての牛嶋神社が見えてきました。

気づけばわたしは、かつての牛嶋神社の境内に立っていました。

そして、一人夜間稽古に励む勝少年をそっと見つめていました。



【墨堤常夜灯】（画：1）

勝少年は裸足で、白い息を吐きながら、掛け声と共に木刀を振り下ろしています。

一通り稽古を終わらせたようです。

ハァーハァーと息を切らしながら、わたしの方へ歩いてきました。

額には汗が光り、とても清々しい笑顔です。

少年時代の勝さんの、まあ、かわいらしいこと！

わたしはさっそく上機嫌で勝少年に声をかけました。

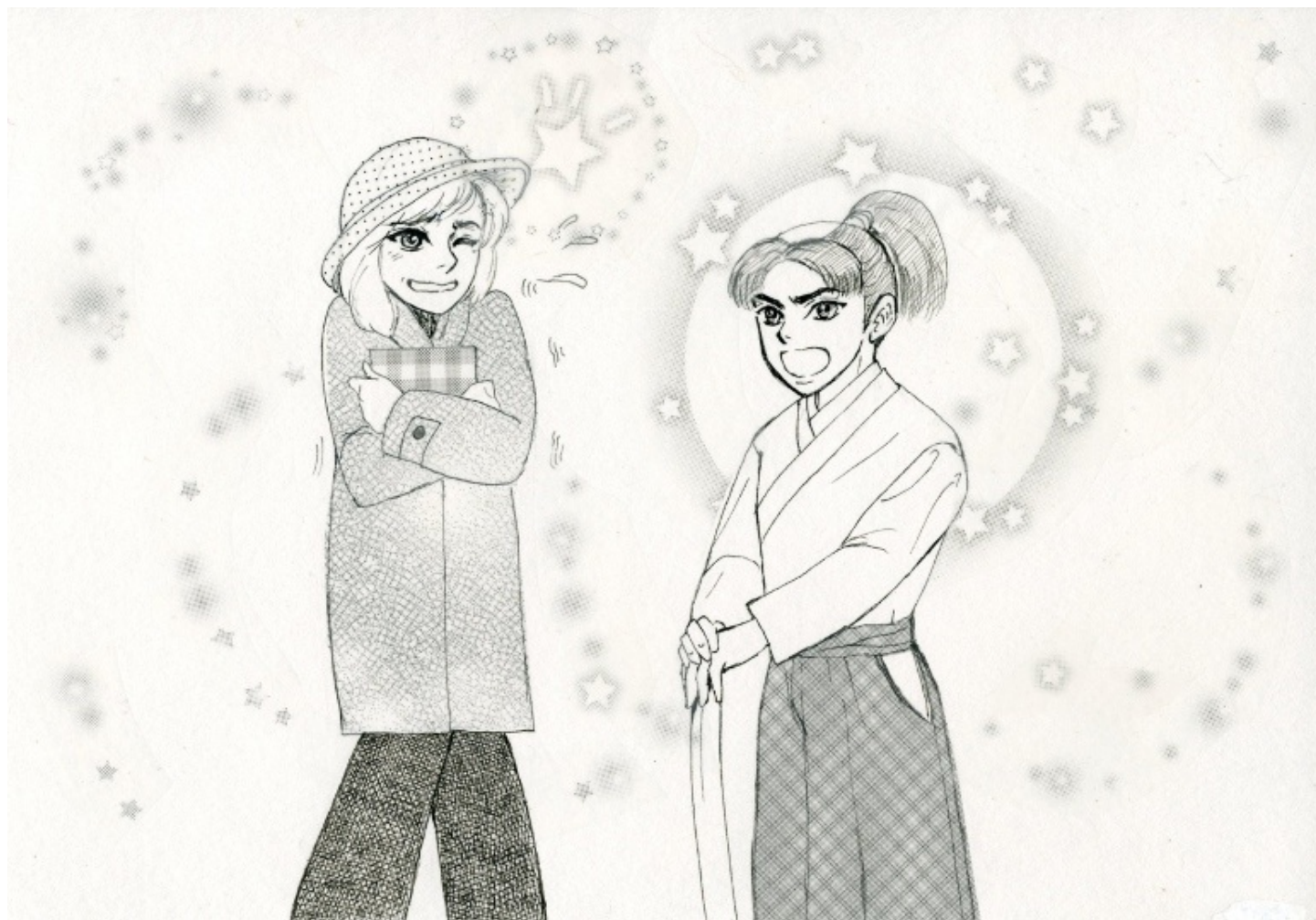
「おつかれさま♪」

すると、勝少年はムツとして、

「疲れてなんかない。」

ああ、やっぱり勝海舟さんだ・・・。

わたしは気を取り直すと、子供だと思って気安く接した自分を反省し（笑）、勝少年に質問をしました。



あっきー

「こうして一人、夜も稽古をするのはなぜですか？」

勝少年

「武道はおもしろい。

がんばったぶん上達するし、強くなる。

手ごたえがあるんだ。

武道には体の大きさなんて関係ないって、父上が言っていた。

わたしもそう思う。」

わたしは墨堤常夜灯で、勝少年から読者へ向けてのチャネリング・メッセージを受け取りました。

一から十を数えるときに、ただ数を数えているだけじゃないんだ。

一にも、二にも、それぞれに意味を持たせて数えているんだよ。

ただ流れるように数を数えているんじゃないんだ。

□

弘福寺、墨堤常夜灯を訪ねたら、ちょっと小腹が空きました（笑）。

お楽しみの時間で～す♪

あっきーオススメの「ひと休みスポット」をご紹介します。



【長命寺さくら餅】（画：1）



【さくら餅】（画：2）

墨堤常夜灯から車道を挟んですぐ向かいにあります。

こちら、「長命寺の桜もち」（画：1）です。

長命寺の桜もちは、桜の葉を3枚使用します（画：2）。

わたしはお店でいただきました。

塩漬けした桜の葉と、上品な餡の甘みがマッチしておいしいです♪

桜の花見シーズンは大行列らしいですよ。



【アート&カフェ こぐま】（画：1）

お次は古民家カフェでのんびりとカフェランチなんていかがでしょうか？
弘福寺より徒歩でおよそ7分の「アート&カフェ こぐま」です。



【店内】（画：2）

お店は懐かしい雰囲気がある「鳩の街通り商店街」にありました。
お店に入り、印象的だったのは学校にあるような椅子とテーブルです。
ストーブや、壁掛けの振り子時計もいい感じですよ（画：2）。

わたしがランチにいただいたのは人気メニュー「特製ひよこ豆のカレー」です（画：3）。

あまり辛い、やさしいお味です。



【特製ひよこ豆のカレー】（画：3）



【栗あんみつ玉】 【こぐま珈琲】（画：4）

やっぱり甘味も食べたいですね？

お店の方とご相談して、人気の「栗あんみつ玉」と「こぐま珈琲」（画：4）をいただきました。

おっと、カップにはこぐまちゃんが！

カレーの後の冷たいあんみつ、たまりません♪

時間を忘れて、のんびり一人で過ごせる落ち着いた雰囲気のカフェでした。



勝海舟生誕地碑（画：1）は、両国駅から徒歩8分ほどの両国公園内に建っています（画：2）。

訪ねてみると、近所の子供たちでしょうか、楽しそうに遊んでいました。本や雑誌を手に取り、ベンチで休憩している男性の姿もちらほら見かけました。そういえば勝海舟さんが眠るお墓のすぐそばにも、公園がありましたね。

※参考

【あっきーと行く坂本龍馬～ゆかりの地からのメッセージ～】

「勝海舟との出会い～その2～」

<http://p.booklog.jp/book/5676>

わたしは記念碑の横に設置してあるベンチに腰掛けました。

しばらくしてから、ベンチ脇にある石段に勝海舟さんが立っていることに気づきました。

勝さんは晩年のお姿です。

こちらを見ているものの、いつもの様子とは違って、何も語らず、ただそこに立っています。

勝海舟生誕地碑2



【勝海舟生誕地碑】（画像：1）



【両国公園】（画：2）

わたしがご挨拶をするとイメージが送られてきました。

一人の侍がかわいらしい赤ん坊を、嬉しくて仕方がないといった表情で抱きかかえています。

赤ん坊は勝さん、侍は勝さんのお父さん、勝小吉（かつ こきち）さんのようです。

ほどなくして、今度は勝小吉さんが目の前に現れました。

どうやら今日の主役は、海舟さんではなくて父小吉さんのようです。

これより、『父小吉、しゃべる、しゃべる・・・』の巻。

※お願い

小吉さんは独特の話し方で、わたしにはこれが江戸の文化かどうかはわかりませんが、そのまま伝わったように、話し言葉風に書いております。

語感、音色に差異があるかもしれませんが、どうぞご了承ください。

おれはあんまり息子にはうるさくは言わなかったな。

あいつは自分からすすんで勉強するような子供だったし、俺に似て負けず嫌いだったから、道場にもまじめに通っていた。

不思議なもんで、子供ながらに先を見越してるような目をして、スッと前を見て歩いていたな～。

俺はよ、目の前のことですぐに頭がいっぱいになっちまうようなやつだったから、あいつの悟りきったような顔は俺譲りではねえな（笑）。

俺の親父に似たのかもな。

ただ、俺はあいつがかわいくてな。

ちょっかいだしては、よく話かけたよ。

あいつもよく笑って俺の話を聞いていた。

あいつがニコニコ笑って帰ってくる時は、学問なり、剣術なり、何か手ごたえがあったときなんだ。

俺は、いつも一緒にいたわけじゃねえけど、そういうときは「おう、どうした！？」って声をかけたさ。

するとさ、あいつは小さい声で教えようとするんだあ。

「男だったらもっとでかい声で堂々と話しやがれ！」って言ってやったよ（笑）。

すると、あいつは恥ずかしそうにしながら聞かせてくれたな。
そういう意味では、俺はあいつが考えてることや、何を思っているかは知っていたかもな。

子供ってやつは、見ててほしいのさ、親にはな。
利口なまじめな親じゃなくても、いつも一緒にいてやれなくても、
「ちゃんと見てるぞ！」
ってわからせたら、子供はまちがったことはしねえもんだ。
(俺はもともと悪餓鬼だったから、少々のことは気にしない性分だけでも・・・)

あいつはまっすぐな性格だったから、余計なことにうつつをぬかすことはなかったさ。

わざわざすねて、親の気をひこうなどということもなかったね。

思えば自分のためにコツコツ努力してたんだな。

あいつは偉いやつだ。

自慢の息子だ。

ここまで軽快に話して下さった勝小吉さん（笑）。

聞いているわたしもついつい楽しくなりました♪

一方の勝海舟さんは・・・。

自分の子供時代をめちゃくちゃ褒められて、照れているご様子です。

すると、ニヤニヤしてるわたしを見て一言。

「うるせえ」

父と息子の、あたたかいエピソードを聞き、わたしもほっこりさせていただきました。

☆勝小吉さんの印象

あくまでもわたしの印象ですが、ズバリ！「遠山の金さん」っぽいです。

着崩した着物姿がなかなか様になっていて、着物の柄や色使いも粋でした。

話をすると気安くて、豪快で、これぞ江戸っ子！みたいな感じ（笑）。

一方で外見とは異なり、とても子煩悩だったことが伝わってきました。





勝海舟生誕の地

所在 墨田区両国四丁目二五番

勝海舟は、文政六年（一八二五）一月三日、本所龜沢町の父小吉の實家である野谷家に生まれ、七歳まで育ちました。幼名は鶴太郎と言います。華臣とは言っても下級武士だったため、苦しい生活を強いられました。それでも少年時代は剣を島田虎之助に学び、肉島の弘福寺に参禅するという日々を送る一方、蘭学者永井青屋について蘭字や兵字について学びました。その後、弘化三年（一八四六）に赤坂に転居するまでは本所入江町（猪四丁目二四番）で暮らし続けました。嘉永六年（一八五三）、幕府に提出した開国後の方針を述べた意見書が採用され、世に出ました。

万延元年（一八六〇）には、日米修好通商条約批准のため軍艦威臨丸艦長として太平洋を横断、アメリカとの間に往復しました。

慶応四年（一八六八）三月、徳川幕府倒壊後の処理を一身に担い、新政府側の中心人物である西郷隆盛と会い、その結果、江戸城無血開城を果たして江戸の町を救ったことには有名です。

海舟は、成立間もない明治政府の上台作りにも手を貸し、参謀兼海軍卿・樺密顧問官などを歴任し、伯爵となりました。

明治三二年一月一九日、七七歳で病没しましたが、養子相続手続きの関係で秘され、二一日に死去が報じられたために、官報や大田区洗足池畔の墓名にも二一日と刻まれています。

平成九年三月

墨田区教育委員会

□

※参考画像 勝海舟揺籃（ようらん）の地

□

うなぎ やっこ1

勝海舟生誕地碑がある両国から少し足を伸ばして、浅草へ移動しましょう。

お目当ては東京メトロ銀座線田原町駅、3番出口より徒歩3分ほどのところにあります。

勝海舟さんやジョン万次郎さんが通ったと言われている「うなぎ やっこ」です（画：1）。



【うなぎ やっこ】（画：1）

勝海舟さんとグルメの融合に、食いしん坊のあっきーはウキウキがとまりません（笑）。

それでは、江戸時代からの老舗の味を堪能しちゃいましょう！



【季節の特選ランチ】（画：2）

わたしは長崎出身なので、江戸前のうなぎの味についてはあまり知りません。

いただいてみると…

上品な薄口のタレに、香りがよい、フワッフワツのやわらかいうなぎ♪

うん、おいしい！

江戸っ子の皆さん、これが江戸前でよろしいでしょうか？

お店は落ち着いた大正浪漫風のインテリアで、わたしが見る限り、勝海舟さんを偲ばせるものはありませんでした。

勇気を出してお店の方にお尋ねしたところ、確かに勝さんは通っていたそうです。

浅草にお出かけの際は、ぜひ。



【雷門】正式の名称は「風雷神門（ふうらいじんもん）」



【東京スカイツリー 浅草駅にて】

□

能勢妙見堂1

勝親子にゆかりの深いお寺があります。

墨田区の能勢妙見堂(のせみょうけんどう)、正式名称は「妙見山別院」(みょうけんさんべついん)と言います(画:1)。

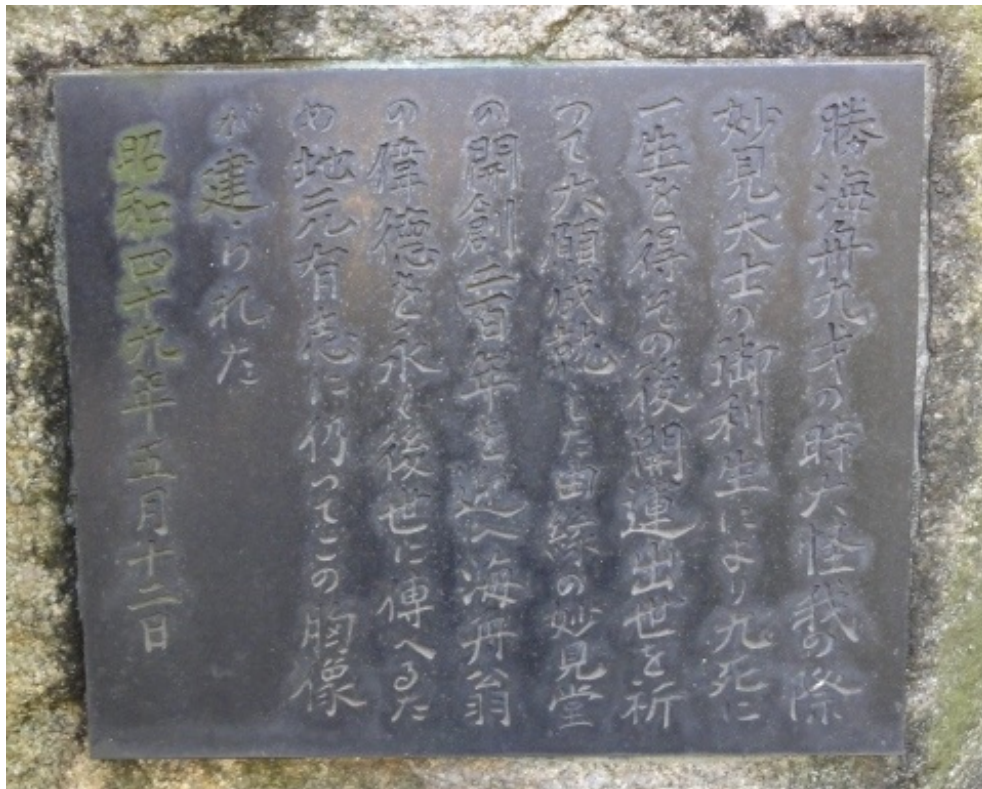
都営浅草線本所吾妻橋駅(ほんじょあづまばし)より徒歩で約10分です。



【能勢妙見堂】 正式名称は「妙見山別院」(画:1)



【勝海舟晩年の胸像】（画：2）



境内には、勝海舟さんの胸像が建っていました（画：2）。

わたしはまず本堂で参拝を済ませてから（画：3）、再び、勝海舟さんの胸像前に立ちました。

胸像と同じく、さっそく晩年のお姿の勝さんがわたしを迎えてくれました。

そして、勝さんが子供のころに犬に噛まれて重傷となったとき、父小吉さんがここ妙見堂で水垢離（みずごり）をして息子の無事を祈願したエピソードについて語ってくれました。

いやあ～思い出したくもない。

あれは壮絶なる苦痛だったからな。

その後のことは、あまり覚えてはおらん。

おそらく気を失っていたんだろう。

親父が必死になって、俺のことを妙見さんをお願いに通っていたことは後から知ったんだ。

近所の人話では、あの頃の親父の形相たるや仁王さんみたいで、怖くて誰も近づけなかったそう。

そんな親父の顔を見たら、妙見さんも願いを聞いてやらないと怖いと思うわな（笑）。

冗談はさておき、親父は他人からは自分勝手な男だと思われていただろうが、肝心なときには俺を守ってくれたんだ。

親父の俺への気持ちってのは、太くて、ゴツゴツして、そんであったけえんだ。

子供の頃の俺は、親父が大好きだったよ。

ここで、わたしは勝さんに質問をしてみました。

「勝さんは子供の頃、お父上から何を学ばれたのでしょうか？」

好きに生きるということでは、親父は一流、天下でも有数だろうな（笑）。
親父は俺のことを、自分とは似ても似つかない息子だとよく言うけども、俺は俺なりに好きに生きたと思っている。

勉強に熱中し、剣術修行に、禪の修業にと好きなことにどんどん打ち込んだ。

子供ながらに、こうした己の日々の変化に手ごたえを感じ、さらにどう生きるかをじっくりと考えることができた。

親父は世のために生きた人物ではないだろうが、自分の人生を目一杯楽しんでいたし、親父なりの筋も通していたんだと思う。

何よりいつも俺を信じていたし、大切に思ってくれた。

親父は今にも三途の川を渡ろうとしている俺の腕を、必死になって手を伸ばし、しっかりつかんでくれたんだ。

わたしには、瀕死の重傷を負った息子を裸で必死に抱きかかえている小吉さんのイメージが見えました。

俺は武士だが、せつかく親父に拾ってもらった命だからな、無駄にはできねえ。

それに俺は蘭学を学んでいたから、おそらく当時の武士とは命に対する考え方は違っていただろうな。

坂本龍馬も、無駄死にはしないと決めていた。

あいつと違って、俺は長生きしたからな（笑）。

多くのことをこの目でしかと見届けてきたし、俺なりに精一杯生きたと思っているよ。

俺は生かされることに、必要な役目があったんだろうな。

坂本龍馬を早くに亡くしたことは本当に残念だった。

でも、あいつだって悔いはなかろう。

あいつは無邪気だったよ。

子供がそのまま大きくなったみたいだな（笑）。

俺が話をするときには、あいつは目を見開いて、大きく頷いて聞いていたよ

。

すぐ感動するし（笑）。

あいつは俺が伝えたいと思ってたことをよく覚えていた。

言葉というよりも感覚で受け取っていたと思う。

あいつは体の中に記憶してる、そんな感じだった。

俺はよ、偏屈だから人の言うことは聞けねえ。

それにあいつよりもちっとは頭がよかったから（笑）、理屈で考えちまう。

でもまあ、子供の頃から修行したかいがあって、相手が腹の中で何を考えてるかはわかるんだな。

だから俺だって、こいつは本気だと思っ相手には、よしわかったと真剣に向き合ったさ。

坂本龍馬だってそうだ。

純粋なやつがいい。

吸収するし、どんどん成長する。

そういうやつは自分を疑うことを知らねえから、そのうちに自信をつけてな、周りが知らないうちに次々と物事を達成しやがる。

坂本龍馬はそういうやつだったよ。



【能勢妙見堂の本堂】（画：3）

さて、能勢妙見堂を後にし、次なるあっきーの目的地は？

そう、ランチですね（笑）。

ちょうどお昼時だったもので♪

出掛けたのは鉄板ハンバーグで有名なお店「モンブラン 吾妻橋店」（画：1）。

都営浅草線本所吾妻橋駅A1番出口から徒歩1分と、初めての方にもわかりやすいですよ。

わたしが選んだのはオランダ風ハンバーグです（画：2）。

鉄板焼きハンバーグは6種類から選ぶのですが、どれもおいしそうでかなり悩みました。

□

【モンブラン 吾妻橋店】（画：1）



【オランダ風ハンバーグ】（画：2）

このオランダ風、ごらんのように溶けたチーズがたっぷりハンバーグにかかっているでジューシー。

味は見た目と違って、意外とさっぱりしているんですよ。

チーズ好きなわたしにはビンゴでした！

ちなみに、土曜日に来店しましたが、ランチセットにはご飯とお味噌汁が付いてきました。

平日だとさらに飲み物も選べるようです。

わたしはミニサラダを追加しましたが、ミニと言いつつ、たっぷりのサラダでお得でした。

他の種類も気になります。

店内には芸能関係者のサインがいっぱい飾ってありました。

さすが、人気店ですね。



勝海舟さんは、佐久間象山（さくましょうざん）さんの私塾で、西洋の兵学及び砲術を学びました。

そして、坂本龍馬さんも同じく門下生の一人でした。

二人に共通する師である、象山さん。

わたしはこの方の存在を知り、とても興味がわきました。

「よし、会いに行ってみよう！」

思い立ったが吉日です♪

さっそく出かけたのは、銀座5丁目付近にある、現在の電源開発本社ビル（画：1）。

象山さんが兵学塾を開いていた場所です。

この日、わたしの目の前に登場したのは、眼光鋭い一人の武士でした。

すぐに佐久間象山さんだとわかりました。

※次ページ 【佐久間象山塾跡】（画：1）



わたしは佐久間象山塾跡にて、佐久間象山さんから読者へ向けてのチャネリング・メッセージを受け取りました。

世間がどうだとか、国がどうだとか、本当のところ、そんなことは関係ないんだ。

自分が何を知りたいのか、何を学びたいのか、どうしたいのか。

それが自分自身を動かす基礎となる。

芯がない者が何を学んだところで、そんなものは一つも知識としては残るまい。

話のネタが少し増えるくらいのものだらう。

全く役に立たないなら、いっそ止めてしまえ。

ここに学びに来る者たちは、学びたいからわざわざやって来るのだ。

だからタダでは帰らない。

皆、貪欲だ。

学ぶことは欲求だ。

欲して、欲して、そのために動いて、その知識を得るのだ。

黙っていて、ある日突然、知識が自分の頭の中に降って来ることはない。

今、学んでいる、その先にある自分の目的をちゃんと定めなさい。

何のために、自分はこうして学んでいるのかをちゃんと知りなさい。

でないと、今日、君たちが繰り返していることは、ただ時間を費やしているだけかもしれないのだよ。

う～ん。けっこう辛口（笑）。

しかもズバズバおっしゃる。

勝海舟さんとは、一味違った厳しさですね。

さっそくここで、わたしが佐久間象山さんを訪ねた理由でもある、二人の教え子について質問をしてみました。

ウキウキ♪

あっきー

「象山先生、あなたの門弟である勝海舟さんと坂本龍馬さんについて、何か印象的なことがあれば、わたしや読者の皆さんに聞かせていただけませんか？」

象山先生

「そうだな。

勝は負けず嫌いで、塾生の中でもとてもよく勉強していた。

勝の学問に対するガツガツした姿勢は、他の塾生たちにも影響を与えていたようだった。

討論が好きでな（笑）。

互いの考えを戦わせては、皆、勝に言い包められて、結局は納得させられていたな。

坂本龍馬…。

ああ、つかみどころがない生徒だったな。」

あっきー

「それはどうしてですか？」

象山先生

「わかりやすく言うと。

勝海舟は、自分が受けたエネルギーは、すぐさま自分自身で跳ね返して、さらに倍にして投げる感じだ。

坂本龍馬は、受けたエネルギーを次から次に自分の中にどんどん吸収している、そんな感じだ。

だが、あいつがあれほどまでの人物になるとはほとんどのものが気づかなかっただろう。」

☆佐久間象山さんの印象

とにかく印象的だったのは、歩く速度がものすごく速いことです（笑）。

まるで小走り？くらいのスピードで近づいてきて、さらに目力の強いお顔と相まって、佐久間象山さんに対するわたしの第一印象は「象山先生、来たぁー！」って感じでした。

なんだかすみません…。

実際に話をしてみると、考え方が厳しい！

だから、耳が痛い…。

質問に対する答え方はとてもわかりやすいですよ。

まるで学校の授業で、先生から黒板に簡単な絵や矢印を書いてもらって、パパッと説明を受けているような感覚になりました。

さすが先生です。



今回の『勝グルメ』は今までにはないパターンです。

それは、いきなり目的が「食べる！」ことだから。

わ〜い、わ〜い♪

「江戸城無血開城」に導いたと言われている、勝海舟さんと西郷隆盛さんとの会談。

この場に鮓を届けたと伝えられている、新富町にある「蛇の目鮓 本店」へ出かけてきました（画：1）。

ちなみに、前作で西郷さんからのチャネリング・メッセージをご紹介します。
こちらを読んでいただくと、より楽しめるかと思います。

※参考

【あっきーと行く坂本龍馬〜ゆかりの地からのメッセージ〜】

「西郷隆盛との出会い」

<http://p.booklog.jp/book/5676>



【蛇の目鮓 本店】 (画：1)

わたしがおじゃました日は、年内最後のランチ営業でした。
間に合ったあ～。

歴史あるお店なので、わたしは少し緊張して入店しましたが、体格のよい、気さくなご主人に迎えられ、すぐにリラックス♪

注文したのはランチメニューの「にぎり寿司」、お椀付きです（画：2）。

おいしい鮓をいただきながら、お店のご主人に勝さんと西郷さんについて尋ねてみました。

「あはは。わたしが配達に行ったわけじゃないんでね。」

なんだか明るく返され、こちらまで笑ってしまいました。

さて、どうだったのでしょうかね？

勝さんは食べたのかな？（笑）

蛇の目鮓4



【ランチメニュー にぎり寿司】（画：2）



島田虎之助（しまだ とらのすけ)さんは、勝海舟さんの剣の師匠です。
勝さんが「弘福寺」で取り組んだ禅修業については前述しましたが、
※「少年・勝海舟との出会い～弘福寺～」

禅の修業は、師匠である島田さんになすすめられて始めたそうです。

わたしは勝海舟さんの少年時代をよく知るこの方に会いたくなりました。
さっそく、島田虎之助さんが眠っている、台東区松が谷にある正定寺（しょうじょうじ）へ出かけました。

正定寺に到着すると、わたしは島田虎之助さんの墓前で手を合わせました。
すると、お墓の後ろ側から、紺色の道着に、右手に竹刀を持った方が現れました。



「よく来たね。」

わたしを笑顔で迎えて下さったのは、勝さんの師匠である島田虎之助さんでした。

わたしは勝海舟さんの修行時代についてお尋ねしました。

勝は小柄だったが、稽古ではいつもハキハキ、堂々としていた。

そして、わたしの厳しい稽古にも必死でついてくる、熱心さとまじめさがあった。

上達したいという高い向上心を持っていたからだね。

しかも、とても賢い子供だった。

だが、剣術中にもつい頭を使って、次の動きを考えてしまうところがあった。

なかなか無心になれない。

それで、わたしから禅の修業ををすすめたんだよ。

わたしの道場では、剣の才がずば抜けていたわけではないが、努力によって着実に身につけていった。

あっきー

「勝さんの、何か印象的な出来事がありましたか？」

島田師匠

「（笑いながら）お父上の小吉さんがね、こっそり稽古を見に来るんだよ。

なんだか近くに用事でもあったようなふりをしてね。

わたしは気づいていたが、知らぬ顔をしてやったよ。

勝もわかっていたのかな？嫌な素振りは見せなかったが。

とにかく小吉さんは、勝の成長が嬉しくて仕方がない様子だった。

小吉さんは気が短くて、ぶっきらぼうだが、人情味があって、人懐っこい。

一見すると似てない親子だが、内面が力強いところはよく似ている。

それに親子とも気質が熱かった。

勝の負けず嫌いな性格と、努力家な部分とが上手に合わさって、一つ一つ積み上げていったと思う。

そういえば、勝は稽古中に決して弱音を吐かなかった。
追い込まれても「駄目です。」「無理です。」などとは一切言わなかった。
いつも大きな声で「よろしくお願いします。」「ありがとうございます。」と言っていた。」

☆島田虎之助さんの印象

あくまでも個人的な主観で言わせていただきますと、第一印象は体育会系のハンサム！

しかも笑顔がさわやか！

人の長所をよく見て、ちゃんと評価するところ、足りないところは助言し、そっとサポートするところなど、良き先生だなあ～と感じました。

それと、小吉さんのエピソードなどは、まじめさの中にもユーモアがあっていいですね。

あは、ちょっと褒めすぎでしょうか？（笑）

今、取り組んでいることがなかなか上手くいかない、行き詰っているという方はお参りに行かれるとよいかもしれません。

きっと、島田虎之助さんがヒントを下さると思いますよ。

しまだ とらの すけ の つか
島田虎之助の墓

台東区松が谷二丁目一番二番二番 正定寺

虎之助は直心影流島田派の剣客。文化十一年（一八一四）に豊前国中津（現大分県中津市）藩士、島田市郎右衛門親房の子として生まれた。十歳頃から、中津藩剣術師範堀十郎左衛門の道場で学んだ。上達が早く数年後には、藩内で相手になる者はいなかったという。十六歳の春および翌年には九州一円を武者修行し名声をあげた。

天保九年（一八三八）に江戸へ出て、男谷精一郎の内弟子となった。一年余で、師範免許を受け、男谷道場の師範代を務める。同十四年、東北方面に武者修行の後、浅草新堀で道場を開く。その道場には、勝麟太郎（のちの海舟）も通った。

虎之助は男谷に次ぐ幕末の剣豪といわれたが、嘉永五年（一八五二）九月十六日に三十九歳で病没。墓碑には、「余、哀歎ほとんど二臂を失うこと」と男谷精一郎の銘文が刻まれている。

平成十五年三月

台東区教育委員会

正定寺7

正定寺は合羽橋道具街のそばにあります。
合羽橋のほっこりした風景をご紹介します。
プチ写真集どうぞ♪





「いらっしゃいませ・・・。」



「あはっ」



「そいやっ」

以上、カッパ☆オールスターでした。





四合稲荷神社1

四合（しあわせ）稲荷神社は、港区にある赤坂氷川神社の摂末社のひとつです。

赤坂氷川神社のパンフレットには、古くより区内にあった古呂故（ころこ）稲荷、地頭（じめし）稲荷、本（もと）氷川稲荷、玉川（たまがわ）稲荷、これら4社の稲荷を遷座合祀（せんざごうし）したことから、勝海舟さんが『四合稲荷神社』と名付けたと書いてあります。

氷川坂入口から大きな鳥居をくぐり抜けると（画：1）、正面に石段が現れます。

わたしが出かけた日は、結婚式が立て続けに予定されていたようで、石段を下りてくる和装姿の新郎、新婦を見かけました。

この石段の手前に、勝海舟さんゆかりの四合稲荷神社があります。

そして、石段を上ると、氷川神社の本殿へと通じています。



【赤坂氷川神社 氷川坂入口 鳥居】（画：1）

わたしが四合稲荷神社で参拝を済ませると、一人の女性が姿を現しました。着物姿の落ち着いた身のこなしで、やや年配の女性でした。その女性もお稲荷さんに向かって手を合わせています。それからゆっくりと顔を上げると、わたしの方へ視線を向けました。

予想では、てっきり勝海舟さんがいらっしゃるものだと思っていたので、わたしは少々驚きながら、お名前を尋ねました。

勝海舟さんの正妻、勝民子（かつたみこ）さんでした。

民子さんは、こうして一人で、よくお参りに来ていたようです。

願うのは家族の安全と健康。

そして、周囲に愚痴や悩みを言わない代わりに、ここに来たときだけは、そっと心の声を神様に打ち明けていたそうです。

最もつらかったのは、長男の勝小鹿（かつころく）さんを病気で先に亡くしてしまったことだそうです。



【四合稲荷神社】（画：2）

わたしは四合稲荷神社で、勝民子さんから読者に向けてのチャネリング・メッセージを受け取りました。

勝は、おそらく、夫としてはあまり良き夫ではありませんでした（笑）

家にいるときは、いつも机に向かって考え事をしていたり、食事を取るのも忘れて、一心に書物を読みあさったり、ひたすら書きものをしていたり。

書齋での後姿ばかりが、わたしの目に焼きついています。

同じ家に住んでいるわたしのことを、少しは気にしているのかと言いたくもなりましたが、当時はそのようなことを妻から夫に言うものではありませんでしたので。

勝は陰ながら努力をする人でした。

いつも一生懸命で、手を抜くことはありません。

一人の人間として、わたしは尊敬していました。

勝は口先だけの男ではありません。

たまに言い過ぎるところもありましたが（笑）。

いつもそばで見てきた、妻であるわたしが言うのです。

気難しく、厳しい性格でしたが、本来はとても情に厚い人でした。

弟子たちのこと、お仕えしてきた徳川幕府のことを、常にどうすべきかと問い、考えて、策を探しているようでした。

一転、仕事に向かうときの前向きさ、力強さは周囲を魅了していました。

ですから、勝を慕って、多くの人々がわたしたちの家を訪ねてきました。

多少、有り余った力が、妻であるわたしを泣かせたりもしましたが（笑）

。

気づけば、わたしと民子さんのやり取りを、勝海舟さんがにんまりしながらそばで眺めていました。

そんなお二人を見ていると、やはり長年連れ添ったご夫婦なんだなあ～と思いました。

再び、わたしは勝民子さんからチャネリング・メッセージを受け取りました。

妻というものは、夫にこう思われたい、などと言う気持ちでいると駄目です。

夫の評価や感謝を期待して、妻の仕事をこなしては不満が募るばかりだからです。

妻として、必要である、やるべきことであるなら、迷わずやるべきです。自分が納得してやることに意味があるのです。

先ほどの甘〜い結婚式の風景と、ベテラン妻、民子さんのキビキビとした助言。
なんだか苦笑いのあっきーでした。
民子さん、勉強になりました（笑）。

☆勝民子さんの印象

失礼ながら、あの勝海舟さんの奥さまですよ！
並みの女性ではないと思っていました。
よく言う、キツイ奥さんを想像していましたが、実際にお会いすると全く違いました。
落ち着いた方で、思慮深く、しっかりとした女性です。
そして人と接するときは、自分の考えを表に出すことを極力控えているのだとわかりました。



四合しあわせ稲荷神社

※毎年四月十五日例大祭
(ご自由にご参列下さい)

・御祭神
宇迦之御魂神—食物の神、殊に稲の神

・御縁起

- ①古呂故稲荷 (赤坂一ツ木二番地、古呂故天神社境内に鎮座)
- ②地頭稲荷 (氷川神社遠座以前より狹の地に鎮座)
- ③本水川稲荷 (本水川神社隣接、別当盛徳寺の地内に鎮座)
- ④五川稲荷 (赤坂門外の御堀端、現舟慶橋のあたりに鎮座)

以上、四社を明治三十一年、遠座合祀し、赤坂在住の勝海舟翁により「四合(しあわせ)稲荷」と称えられる。
大正十四年に、鈴降稲荷神社(赤坂一ツ木町に鎮座)及び、縁起稲荷神社(赤坂丹後坂下に鎮座)二社を、また昭和九年に、明徳稲荷神社(赤坂新町に鎮座)を、遠座合祀し、現在に至る。
勝海舟翁筆の「四合稲荷社」という扁額が、現存する。

・附記

古呂故稲荷神社は、古呂故天神社境内、氷川田社地(氷川御旅所)に祀られていた稲荷社であって、明治十七年、氷川田社地を売却した際、現氷川神社境内へ遷座、のちに四合稲荷に合祀された。
地頭稲荷神社は、享保年間、現氷川神社遠座以前より祀られていた稲荷社である。
本水川稲荷神社は、本水川神社(昔は溜池付近にあり、のち承応三年に、現氷川神社の隣地へ遷座、令井の総持守として、住民から尊崇を受けていた)境内の稲荷社で、本水川神社と共に明治十六年、現氷川神社境内に遷座、のちに四合稲荷に合祀された。
五川稲荷神社は、水邊方五川庄右衛門の邸内社だったとする説もあるが、御神体が五川上水に流れ来た故に、五川稲荷と称したものと推定される。明治二十一年、現氷川神社境内に遷座、のちに四合稲荷に合祀された。

旧相良藩邸1

港区赤坂には、前述しました四合（しあわせ）稲荷神社の他にも、勝海舟さんゆかりの地がいくつか点在しています。

やはり有名なのは勝海舟邸跡でしょうか（画：1）。



【勝海舟邸跡】（画：1）

こちらは四合稻荷神社がある、赤坂氷川神社の近くにあり、現在は「EXCELLENT BAR GABY」が建っています。

わたしが勝海舟邸跡で受け取ったチャネリング・メッセージとMAPを、前作※でご紹介していますので、よろしければこちらも参考にしてみてください。

※【あっきーと行く坂本龍馬～ゆかりの地からのメッセージ～】

「勝海舟との出会い～その1～」

<http://p.booklog.jp/book/5676>

そして、勝海舟邸跡から徒歩で5分もかからない場所に、なんと天璋院篤姫（てんしょういん あつひめ）さんが暮らした場所があります。

そこは旧相良藩邸(きゅうさがらはんてい)で、現在は赤坂溜池タワーが建っています（画：2）。

ちなみに、大政奉還により江戸城から出ることになった篤姫さんは、いくつものお屋敷を転々と移り住むことになり、港区では3ヶ所のお屋敷に住みました。

旧相良藩邸はそのうちの一つです。



【旧相良藩邸】（画：2）

さて、赤坂溜池タワーに到着しました。

わたしが入口手前に設置されているベンチに腰を下ろすと（画：3）、程なく篤姫さんが現れました。

一見すると地味な着物姿で、かつての大奥を思い起こさせるようなものは一切見当たりません。

それでも、穏やかな微笑と気品のある物腰は隠せません。

篤姫さんはわたしの隣に腰を掛けると、勝海舟さんについて話してくれました。

勝はね、優しい人です。

とても気遣いがある方です。

あと、面白いわね。

きっと賢いからよ（笑）。

わたしは、物事を少し深刻に受けとめるところがあるらしいの。

そう、西郷もそういうところがあったわね。

薩摩の気質なのかしら（笑）。

わたしの肩に力が入り、構えているときは、いつも勝に肩すかしを食わされるのです。

すると、そんな自分が滑稽に思えて、わたしも、周りのものも、つい笑いってしまうの。

そして、勝から「そのくらいでいいのだ」と教わるのです。

勝はいつもわたしたちの見方になってくれました。

さりげなく見守ってくれたこと、本当に感謝しています。

思えば、わたしにとっては兄のような存在でした。

それから、旧相良藩邸にて、わたしは篤姫さんから読者に向けてのチャネリング・メッセージを受け取りました。

物事は大変だと思ったら、そのようになります。

でも、たいしたことはないのだと思ったら、案外、なんとでもなるものです。

日々の暮らしにおいて、何に焦点を合わせるかで、感じ方も過ごし方もおのずと変わってきます。

物事には、明るい面と、そうでない面があるでしょう？

なるべく明るい面を、ほっとする部分をひとつひとつ探して暮らしてみるのです。

すると、自分が考えていた以上に、暮らし向きというのはそんなに悪くはないものですよ。

わたしはかつて、「この命を捨てても」と覚悟を決めました。

その命は再び与えられたと思っています。

今はこうして、一人の女性として生きています。

大奥を出てからの生活は豊かではありませんでしたが、わたし自身の人生を生きたとような気がしています。

小さなことにも、いつも喜びと発見がありました。

そして、そのひとつひとつに幸せが含まれていました。

皆で泣いて、笑って、感動して、わたしらしい日々だったと思っています。





【赤坂溜池タワー ベンチ】（画：3）

☆天璋院篤姫さんの印象

お会いしてすぐに感じたことは、とても温かい感じがするということです。
目と目を合わせたたん、ふわっと包み込まれるような雰囲気の方でした。
話をしてみると、全体を見渡せるような余裕があるのに、一見するとさりげなくて、それが美しいなあ～と感じました。

わたしは篤姫さんとお会いして、前作※で、千葉佐那さんから『日本女性の美しさ』について受け取ったメッセージを思い出しました。

※【あっきーと行く坂本龍馬～ゆかりの地からのメッセージ～】

「千葉佐那との出会い」

<http://p.booklog.jp/book/5676>

旧相良藩邸10

さて、お楽しみのランチをご紹介いたしましょう♪

旧相良藩邸、現在の赤坂溜池タワーと同じ敷地内に、とっても素敵なフレンチレストラン「Chemins（シュマン）」があるんですよ。



先ほど、篤姫さんにありがたいお話を聞かせていただいたにもかかわらず、なんとも贅沢なお昼で、ちょっと申し訳ない気分ですが。

せっかくですもの、堪能しなくちゃね！

ちなみにこちらのフレンチレストランはドレスコードがございますので、少しおしゃれをしてお出かけいただければと思います。

お店に入るとほぼ満席状態でした。

あらかじめ予約をしておいてよかったです。

わたしは前菜を2品選べる、ランチコースを注文しました。

この日は、ランチのあとにもチャネリングに出かける予定でしたので、くう～！泣く泣くワインは断念。

それでは、いただいたお料理をプチ写真集でご紹介いたします。









新鮮な食材を使ったお料理たちは、目も舌も楽しませてくれます♪

特に前菜の「人参のムースとコンソメジュレ、うに添え」が美味しかったです。

これはお酒が好きな方は、つい飲みたくなるかもしれません（笑）。

お料理はゆっくりと出てきますので、お時間に余裕があった方がいいですね。

わたしのように一人だと、ちょっと間が持たないかな？

皆さん、お友達同士やカップルだったので、賑やかに会話を楽しみながら召し上がっていらっしかったです。

このお店のランチを取り入れて、「勝海舟さんゆかりの地を巡る☆赤坂デートコース」なんていかがでしょうか（笑）。

「勝安芳邸跡」(かつやすよしていあと)(画：1)は勝海舟さんが明治維新後から亡くなるまで住んでいたところです。

現在は「プラザ赤坂なんで〜も」と呼ばれる、港区立赤坂こども中高生プラザ(画：2)が建っています。

施設内には「氷川小学校記念コーナー」があります(画：3)。

氷川小学校が廃校となったのち、プラザ赤坂なんで〜もが建てられました。

こちらには、発掘調査で発見された食器などが展示されていました(画：4)。

わたしは敷地内のラウンジに座り、勝海舟さんを待つことにしました(画：5)。

すると、すぐに勝さんが現れ、わたしの向かいの席に腰を下ろしました。

※【勝安芳邸跡】(画：1)





【プラザ赤坂なんで〜も】（画：2）



【氷川小学校記念コーナー】（画：3）



【ラウンジ】（画：5）

あっきー

「勝さん、こんにちは。
こちらでの生活はいかがでしたか？」

勝

「そうだなあ～。
正直なところ、退屈だったかな（笑）。
もう、以前のようにあちこち走り回ることもなかったからな。
しかし、客人は相変わらず多かった。
まあ、昔のことを聞かれるだけだがね。」

わたしには、書斎で一人、書き物をしている勝さんのイメージが見えました。
勝さんの引き締まった表情と、書斎の窓から見える若葉が印象的です。
窓から入る風が肌に感じられ、そこは四季を感じさせる空間でした。

あっきー

「あれ？

勝さんは日記か何かを書いていらっしゃったのですか？」

勝

「日記というか記録だな。

これまでの経験や感じたこと、気づいたことをまとめていただけだ。」

あっきー

「それは公になっていますか？」

勝

「いや。

まあ、生き延びたやつは役割みたいなもんだな（笑）。

俺の命は、俺だけのものじゃねえんだな。

これまでに大勢の同士がいて、やつらの思いも託されているだろうから。」

わたしは勝安芳邸跡にて、勝海舟さんから読者に向けてのチャネリング・メッセージを受け取りました。

自分の命は自分だけのものだなんて考えはとんでもねえ話だ。

おい、たくさんの命がそこにつながっているんだよ。

お前一人のもんじゃないやねえ。

生きているとな、多くの人と関わるだろう？

それだけ多くの人のおもひや願ひが、その出合ひで生まれるんだな。

え？ 大変だって？

そんなことは当たり前な話だ。

当然のことだから、大変だなんて考えるな。

最近のやつらは頭でっかちだな。

生きることを重荷に感じる必要なんてねえ。

自分のことばかり考えるからそうなるんだよ。

他人と比較することはいらねえが、周りが見えてないのはどうにも困る。

話を戻すが。
生かされいるんだよ。
感謝はしなくちゃいけねえ。
だから、精一杯生きるんだよ。
自分の歴史をしっかりと残すんだ。

胸にズシンと届く力強いメッセージでした。

個人的には、勝さんはサラリと流されましたが、勝安芳邸跡で記したものは、いったいどこにあるんでしょう？

ああ～気になる、気になる・・・。

東京都指定旧跡

勝安房邸跡

この地は、幕末から明治にかけて、幕臣として活躍した勝海舟が明治五年（1872年）の49歳から満76歳で亡くなるまで住んでいた屋敷の跡地です。その間、参議・海軍卿、枢密顧問官、伯爵として顯官の生活を送り、傍ら有名な『氷川清話』などを遺しました。その時の屋敷跡は東京市に寄付され、平成五年（1993年）春まで港区立氷川小学校敷地として使用されていました。その後、氷川小学校が廃校となったため、その建物を生かしつつ改修を行い、平成十五年から区立特別養護老人ホーム及び子ども中高生プラザとして使用して現在に至っています。施設内には、屋敷跡の発掘調査で出土した当時の縁の品などが展示されています。

港区



大坂屋砂場1

その日は「勝グルメ」の取材でした。

わたしはいそいそと虎ノ門にある「大坂屋砂場」（おおさかや すなば）（画：1）へ出かけました。

何が楽しいって聞かれたら、そりゃもうグルメ取材が一番なんです（笑）。

お気づきですね？、アハッ



【大坂屋砂場】（画：1）



さっそくお店に到着です。

虎ノ門のオフィス街に突如現れる、風格ある佇まいです。

わたしが訪ねたのは土曜日のお昼でした。

そのせいなのか、サラリーマン風の方はほとんど見かけませんでした。

ご年配のご夫婦や、お一人で来ている紳士がほとんど。

わたしはお店の入口に案内されていた、季節ごとの変わり蕎麦「白子蕎麦」がどうしても気になって、せいろを頼むつもりが急遽変更となりました（笑）。

でも、「白子蕎麦」にして大正解！（画：2）

薄皮でパリッと揚がったトロット口の白子天ぷらを、少し甘みがあるお出汁で蕎麦と一緒にいただきます。

ああ～なんて美味しいのでしょうか♪

また食べたいので、お店の方に伺ったところ、白子が新鮮な状態で食べれる時期のみに出しているの、いつからいつまでとは明記していないのだそうです。



【白子蕎麦】（画：2）

あっ、大事なことを忘れるところでした！

そうだ、わたしは取材に来ているのでした（笑）。

お蕎麦を食べ終わると、わたしは長くお勤めされているような店員さんに、勝海舟さんについてこっそり尋ねてみました。

するとっ！！

「鉄舟さんはよく来てくださったそうで、書もございますが、勝さんはどうでしたかね？」

ええ～！！

他の店員さんにも確認されましたが、どなたも「はて？」っと言ったお返事です。

困った、これは困った。

わたしはこの美味しいお蕎麦をぜひ紹介したいのに、どうしよ。

しばし考えるあっきー。

ピンポン！

あっ、山岡鉄舟さんは勝海舟さんにゆかりがある方でした。

と言うことで、食いしん坊あっきーらしく逆転の発想で、この後、山岡鉄舟さんに会いに行くことになりました。



「大坂屋砂場」のグルメ取材がきっかけで、わたしは山岡鉄舟（やまおか てっしゅう）さんが眠る「全生庵」（ぜんしょうあん）（画：1）を訪ねました。

この寺は千駄木駅（せんだぎ）から徒歩で約5分のところにあります。

徳川幕末・明治維新の際にお亡くなりになった方々の冥福を祈って、供養のために山岡鉄舟さんが建立されたのだそうです。

まずは本堂へ、そして山岡鉄舟さんの墓（画：2）へと向かいました。

墓前で手を合わせていると、鉄舟さんのイメージが送られてきました。

暗いお堂で、一人静かに座禅を組んでいるお姿です。

膝の上で重ねている、細く硬そうな指が印象的でした。

しばらくすると暗いお堂の中で、鉄舟さんの周りを、ピカッピカッと点滅する強い光りが見えました。

その光りの中でも、鉄舟さんはピクリとも動きません。

わたしが顔を上げると、正面に座禅を組んだ山岡鉄舟さんが現れました。

鉄舟さんはゆっくりと目を開けると、静かにわたしを見つめています。



【全生庵】（画：1）



【山岡鐵舟の墓】（画：2）

わたしは全生庵で、鉄舟さんからのチャネリング・メッセージを受け取りました。

心がざわついている人を多く見かける。

その心は、まるで周囲からの視線を気にしてキョロキョロと動いているかのように落ち着きがない。

自分自身の心の内の、さらに内を、しっかりと見つめたことはあるか？

そのために座禅はとても適した方法だと知ってもらいたい。

座禅を組むと、はじめはいろんな感情があふれてくるだろう。

はじめはそれでよいのだ。

何をしたいのか、どう生きたいのかが見つけられずに、途方に暮れている若者を多く見かける。

今はインターネットをはじめたくさんの情報が外側から入ってくる。

しかし、いくら外に目を向けたところで、自分の内に目を向けなくてはその答えはわからない。

わたしたちの時代にはそのようなものはなかったが、自分自身と向き合うこと、尊敬する師匠に教えを請うことを繰り返しながら、常に目的意識を持って生きていた。

わたしたちが行動する先には必ず目的があったのだ。

目的を持たず行動しても、そこには何の意味もない。

何となく月日を重ねるだけの生き方をすべきではない。

人は決められた時の中で生きているのだ。

今の人生には限りがあり、一瞬一瞬に重みがある。

心静かに、本当の自分に出会う努力をしなさい。

それが座禅であり、この寺は気づきの場の一つである。

皆にすばらしい機会が訪れることをわたしは願っています。

わたしは山岡鉄舟さんに、勝海舟さんについて尋ねてみました。

明るい人です。

周りには自然と人が集まってきました。

騒々しい人物だと誤解されることも多かったようですが、実際は違います

。

わたしと同じく禅に通じており、心を鎮め、集中して物事の本質を見極めようとしていました。

行動の元となるものは、共に武士道です。

各々の表現方法は異なるとしても、目指すところは非常に近かったと思います。

ですから、何か提案を受けるときは、考えた末でのことです。

わたしは誠心誠意それに応えようと努めました。

東京都指定旧跡

山岡 鉄舟 墓

所在地 台東区谷中五丁目四番七号 全生庵墓地
指定 昭和二十八年十一月三日

江戸開城の功勞者で宮内省御用掛を務めた鉄舟は、天保七年（一八三六）六月十日幕臣小野朝右衛門の五男として江戸本所に生まれた。通称は鉄太郎、諱は高歩、字は曠野、猛虎、鉄舟、一楽斎は号である。父の飛騨郡代在任中、高山で井上清虎に一刀流を学んだ。嘉永五年（一八五二）江戸に戻り槍術の師山岡静山の婿養子となって山岡家を嗣いだ。幕末の動乱の中で東征軍の東下に対し、駿府で西郷隆盛と会見し、勝海舟と協力して江戸無血開城を実現させた。明治維新後は天皇の側近として宮内大書記官や宮内少輔などを歴任した。公務の傍ら剣術道場を開き、明治十三年（一八八〇）には無刀流を創始した。書家としても優れ、また明治十六年（一八八三）臨濟宗普門山全生庵の開基となった。開山は松尾越叟である。明治二十一年（一八八八）七月十九日五十三歳で死去した。

山岡家墓所には、墓壇上にある有蓋角塔の正面に「全生庵殿鉄舟高歩大居士」とある。墓所の周囲には、鉄門といわれる石坂周造、千葉立造、松岡萬、村上政忠の墓がある。

平成十三年三月三十一日 設置

東京都教育委員会



☆山岡鉄舟さんの印象

鉄舟さんのチャネリング・メッセージを受け取っていると、心が落ち着き、素直な気持ちになります。

迷っている日本の若者をサポートしたいとお考えです。

行動が定まらない方や、目的に向かって背中を押して欲しい方は、訪ねてみるとよいですよ。



【 いせ辰 谷中本店】（画：1）

東京メトロ千駄木駅1番出口から徒歩2分、全生庵への道すがら、とある看板が目に留まりました。

「いせ辰 谷中本店」（いせたつ やなかほんてん）（画：1）です。



江戸時代末期から続く、江戸千代紙や紙工芸品の専門店だそうです。

ちょうど2011年の干支、うさぎの品々がディスプレイを飾っていました。

かわいい～♪

わたしはこちらでポチ袋と、うさぎの置物、手ぬぐいをお土産に買いました。

年始の帰省に持ち帰ったら、母がとても喜んでくれました。

皆さんも、江戸の土産にいかがでしょうか？



もしかしたら、愛宕山（あたごやま）には「呼ばれたのかな？」と思っています。

以前にワイン好きな友人の紹介で、わたしは近くの「レストランS」をディナーで数回訪ねていました。

ソムリエ田崎真也さんがプロデュースするフレンチレストランです。

お店の帰り道、わたしは近くの愛宕神社（あたごじんじゃ）の存在がなぜか気になっていました。

ですが、特別な行事でもなければ、わたしは夜の神社へは行かないので、そのままになっていました。

しばらくして、同じく田崎真也さんがプロデュースする「和食T」というお店が、愛宕神社の境内にあると聞きました。

美味しい食べ物と神社の組み合わせには、めっぼう弱いあっきーのことです。

今度はランチに出かけようと、さっそく調べてみました。

愛宕神社2

すると、愛宕神社（画：1）は勝海舟さんと西郷隆盛さんのゆかりの地でもあることがわかりました。

「ええ～！！早く言ってよ。」（誰に言ってるの？）

食べ物に誘われて、ホイホイと乗った感が大アリですが。

いえ、それは大正解だと思いますよ、勝さん（笑）。

そうとわかれば、行かなくちゃ！

勝さんゆかりの神社である愛宕神社と「和食T」へ♪

最寄の駅から愛宕神社へ向かうルートはいくつかあります。

わたしは日比谷線「神谷町駅」（かみやちょう）で下車し、神社まで5分ほど歩きました。

「出世の石段」（画：2）と言われている愛宕神社正面の坂（男坂）からは上らなかったのですが、上から見下ろすとかなり迫力があります（画：3）。

この時期は、愛宕神社の紅葉も終わりに近づいていました（画：4）。

まずは社殿で参拝をしてから、太郎坊社（たろうぼう）と福寿稻荷社（ふくじゅいなり）など末社（画：5）へ。



【愛宕神社】（画：1）



【出世の石段】（画：2）



【出世の石段】（画：3）



【愛宕神社の紅葉も終わりの頃】（画：4）



【太郎坊社と福寿稲荷社】（画：5）

参拝を終え、境内のベンチに腰を下ろすと、わたしの目の前を雅楽の音色と共に、参進する新郎と新婦が通っていかれました（画：6）。

おめでとうございます。

結婚式のご一行が社殿に入り、静かになったところで、勝海舟さんと西郷隆盛さんが登場されました。

しかも和やかに談笑中、このお二人はほんとに仲がよろしい（笑）。

さて、わたしもいますよとばかりに、さっそくインタビュー、スタートです。

あっきー

「こんにちは。

ここでお二人は、江戸の町を眺めながら話をしたのですか？」

勝

「ああ、そうとも。

護衛のものも一緒だったがね。」



【参進】（画：6）

あっきー

「当時は大変な状況でしたか？」

勝

「そうだな。

互いの考えは近くても、話をひとつにまとめるのには苦勞した。」

あっきー

「ここでどんな会話をしましたか？」

勝

「ここでは具体的なことは話してはおらん。

ただここにいると、時の流れや、時代のうねりのようなものが感覚としてつかみやすかった。

江戸の町を眺めるように、自分たちがとるべき道を達観する必要があったのだろう。

ここで、語らずとも確認はできたのだからな。」

しばらく、わたしと勝海舟さんとのやり取りが続き、西郷さんはじっとそばで聞いていました。

西郷さんともお話がしたくて、わたしから話しかけてみました。

ちなみに西郷隆盛さんとは、旧薩摩藩蔵屋敷跡でお会いして以来です。

※参考

【あっきーと行く坂本龍馬～ゆかりの地からのメッセージ～】

「西郷隆盛との出会い」

<http://p.booklog.jp/book/5676>

あっきー

「西郷さん、お久しぶりです。

今度は勝海舟さんの本を書いています。

ここ愛宕神社で、西郷さんから読者に向けて、何かメッセージがございましたら、お聞かせください。」

ここは、悲しい歴史を刻んでいる場所でもある。

わたしも経験者だが、戦争というものは、多くのものを犠牲として成立する。

尊いもの、人の命や願いを奪い去り、跡には虚しさと絶望しか残らない。

現代は自分の生き方を選ぶことができる。

選択肢があることが、いかに幸せであるかを知ってもらいたい。

悲しい歴史の事実には、当時はそれを選ぶしかなかったという各人の背景があったのだ。

感謝する気持ちを忘れずに、これからの自分の人生、大志をもって歩んで欲しい。

それにしても今日はよい日だな。

境内の紅葉は美しいし、結婚した二人、それを見守る人々も嬉しそうだ

。

わたしも気持ちがあたたかくなったよ。

そう話すと、またお二人で談笑しながら去って行かれました。

※参考

境内には、ここが「桜田門外の変」で井伊直弼（いい なおすけ）を討った水戸浪士集結の場所であることを伝える「桜田烈士」の碑や、大東亜戦争に対して日本の降伏に反対し、愛宕山で自決した義軍烈士とその婦人二人を祀った「十二烈士女」の碑があります。

それでは、おすすめのランチをご紹介します。

愛宕神社の境内にある、創作料理のお店「和食T」（画：1）です。

オーナーはソムリエの田崎真也さん。

素材にはこだわりがあり、地元・東京産だそうです。

美味しい地ビール、地酒、島焼酎などもいただけますよ。

わたしですか？

お酒は泣く泣く我慢いたしましたあ～。

こちらは愛宕神社での婚礼控え室、団体などの利用で貸切になることがあります。

わたしが訪ねた日は午前中は控え室として利用されていましたが、ランチは可能でした。

わたしは、当日の午前中に予約をしてから、ゆっくりと参拝し、ランチをいただきました。

入店したときには、お店はほぼ満席状態でしたよ。

土日祝にご利用の際は、事前に予約、確認されることをおすすめします。



【和食T】（画：1）



【愛宕丼】（画：2）



わたしがいただいたのは「愛宕丼」です（画：2）。

東京しゃも、青梅産卵（おうめ）を使った親子丼。

見ての通り、ボリュームあります！

フワフワの青梅産卵と弾力ある東京しゃも肉は、食感が良く、おいしかったです♪

愛宕丼には前菜、野菜たっぷりの味噌汁と、食後にコーヒー、かりんとうが付いてきます。

ランチもぜひ♪





勝海舟さんとあっきーの記念撮影です♪
最後まで読んで下さり、ありがとうございます。



参考文献1

【参考文献（Webページ）】 ※ 2011/3/1 アクセス

「墨田区公式ウェブサイト」

<<http://www.city.sumida.lg.jp/index.html>>

「墨田区観光協会」

<<http://visit-sumida.jp/>>

「台東区ホームページ」

<<http://www.city.taito.lg.jp/index.html>>

「中央区観光協会」

<<http://www.chuo-kanko.or.jp/>>

「MINATOあらかると」

<<http://www.minato-ala.net/index.html>>

「楽天トラベル たびノート」

<<http://kanko.travel.rakuten.co.jp/>>

「能勢妙見山」

<<http://www.myoken.org/menu.html>>

「赤坂氷川神社」

<<http://www.akasakahikawa.or.jp/>>

「全生庵」

<<http://www.theway.jp/zen/>>

「愛宕神社お正月」

<<http://www.atago-jinja.com/>>

「港区立赤坂こども中高生プラザ・プラザ赤坂なんで～も」

<<http://www.seirouin.or.jp/nandemo/>>

☆～ Special thanks ～☆

勝海舟

勝小吉

勝民子

西郷隆盛

天璋院篤姫

山岡鉄舟

佐久間象山

島田虎之助

坂本龍馬

c e r e n a

ガイアの光り

m y f a m i l y

☆～ 協力 ～☆

【表紙イラスト・本文イラスト】 美紀羽

スピリチュアル・アート

東京都在住。

幼い頃から見えない世界の住人たちと遊びながら描いていたが、その絵に彼らのエネルギーが宿ることを発見。

イラストレーターとして、妖精や精霊、龍たちのエネルギーを届けることに。

<<http://www.mi-gi-wa.com/>>

【表紙デザイン・マップ製作】 ナカムラ ナオコ

【プロフィール撮影】 なお

【構成・本文撮影】 あっきー

プロフィール1

☆～ プロフィール ～☆



著者 あっきー

出身地 長崎県諫早市小川町

職業 眼科院長（東京都渋谷区） ・ スピリチュアリスト

HP <http://salondeakinews.edoblog.net/>

2011年3月5日 初版発行



大村湾

(撮影 My Father)

最後に

【ご注意ください】

ご紹介したメッセージは、あくまでもわたしが個人的にチャネリングした結果で、歴史上の話とは異なる可能性があります。

この件に関する一切のクレームは受け付けませんので、ご理解のほど、どうぞよろしくお願いします。

【マウントシャスタ】2010年8月撮影

